
ふえいと/くえすと

純白の騎士王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふえいと／くえすと

【Nコード】

N5192H

【作者名】

純白の騎士王

【あらすじ】

——それは、遠い昔のとある王国の話。召喚され勇者になった士郎。モンスターの殲滅及び魔王討伐という名のサーヴァント退治へ。半ば強制的に……というか、勝手に仲間になるセイバーをはじめとする仲間たち……正義の味方の苦勞は続く……
・というか、ここどこ？

STAGE0：オープニング（前書き）

どうも。初めての人は初めまして、前作を読んできた方々、お久しぶりです。久しぶりの投稿です。まだ二作目なので、うまくかけていないと思いますがよろしく願いします。――<でわ、どうぞ。

STAGE 0：オープニング

——それは遠い遠いとある王国の勇者の話。

突如として現れた魔王を倒すため異世界から召喚された勇者の話。

初期能力が色々な意味でスゴい勇者の話。

仲間があり得ないくらい強かった勇者の話。

果たして、勇者の運命やいかに！！

このお話は、FateのIFのお話・・・作者の妄（ryから始まったお話・・・

もしも、F a t eがR P Gになってしまったら・・・。

さあ、楽しい楽しい宴の始まりだ・・・

・・・開幕を宣言しよう！！！

STAGE 0：オープニング（後書き）

意味不明なところが多かったかもしれませんが、ゲームのオープニングなんてこんなものです。・・・ウソですゴメンナサイ>（

ー）<

あらすじとオープニングが微妙に違う感じがしますが、あらすじに沿っていこうと思っていますので、そのつもりでお願いします。オ

ーピングは本編にあまり関係ないです。

なら、どうしてオ

ーピングをかくのか？ときかれそうですが、ゲームにはオープニングがありますので・・・一応。若干後書きの方が本編よ

り長くなった気がするので、この辺で。

これから

の話はキャラが若干崩れていく予定です。いろいろな所でネタが出てきます。頭の中力オスです。ではまた。

STAGE 1：召喚（前書き）

大変遅くなりました。

色々考えていると、いつも時間だけが過ぎて、全く進みませんでした・・・。

この作品は、筆者の妄想が
たくさん詰め込まれています。ですから、あれ？これ変じゃない？とか、おかしい所がたくさんあると思います。ですから、オリジナルが大好きな人や、こういうのが嫌いな人は、見ないことをおすすめします。
あと、オリキャラが出て来ます。あしからず。
では、どうぞ！

オリキャラの名前修正して短くしました！

STAGE 1：召喚

俺《衛宮士郎》は傷だらけだった。刀に斬られた傷。槍に刺された傷。銃で撃たれた傷。他にも、数え始めたらきりが無い程に士郎ボロボロだった。

「・・・ぐっ・・・くはぁ・・・ハア、ハア、これはマズいな・・・ここまでか・・・くっ」

士郎の脳裏に四人の女性の姿が浮かぶ。

「・・・セイバー、凜、桜、イリヤ。できればもう一度会いたかった・・・ゴハア・・・ハア、ハア、でも、もう無理みたいだ・・・ゴメンな・・・」

そういつて、士郎は目を閉じかけ・・・ようとしたが、突然現れた光に包まれた。

「なんだ、これは！？それに、傷が治って・・・」

最後まで言い終わる前に、士郎の意識はブツリと途絶えた。――

——冬木市とは全く違う遠い昔の別の次元。

冬木王国のある世界、《理想郷・アヴァロン》では、二、三ヶ月前から謎の組織が現れた。^{アンリ・マユ}彼らは人とはかけ離れた身体能力を持つ、大昔の英雄の霊、^{サーヴァント}英霊を召喚、使役し、世界を破壊しようとしていた。《サーヴァント》は七体召喚され、それぞれ、
セイバー

《騎士》

アーチャー《弓兵》

ランサー《槍使い》

ライダー《騎手》

アサシン《暗殺者》

キャスター《魔導師》

バーサーカー《狂戦士》

の七つのクラスがあり、一体につき一つ、それぞれクラスが与えられた。サーヴァント達は、その並外れた身体能力で、次々に国を滅ぼした。

そんなサーヴァントの中に《アンリ・マユ》に召喚されたとき、裏切った者が二人いた。

セイバー《アーサー・ペンドラゴン》と、

アーチャー《????》の二人である。

二人は《アンリ・マユ》が世界を破壊するための組織であると知り、己の持つ正義の心で組織に反発、逃走したのである。逃走した二人の行方は、誰も知らない……。

《冬木王国城》 ??? side

「ソラウミナ姫様、最早時間がありませぬ。早急に英雄召喚の儀式を。」

家臣の者が静かに私にそう伝えた。

「・・・わかりました。これより、英雄召喚を行います。準備を。」

「かしこまりました。」

《冬木王国城地下》

「では、始めます。」

地面には大きな魔法陣。そしてその魔法陣の中心には、無数の剣が刺さっていた。

《???》 士郎side

ドスン！

「うわッ！」

光の中からいきなり飛ばされ（落ちて）、士郎はしたたかに頭を打った。

ごんっ！

「なはあ！」

変な悲鳴を上げ、少し意識が三途の川を渡りかける。なんとか目を覚まし、あたりを見渡してみると・・・。

「・・・これは？」そこにあっただのは・・・

剣

何本ものありとあらゆる種類、大きさの剣が地面に突き刺さっていた。

「これは・・・俺の固有結界？」

そう、そこに広がっていたのは、士郎の固有結界《アンリミテッド・ブレイドワークス（無限の剣製）》であった。

「なんでさ・・・。」

士郎の口癖が久し振りに炸裂。だが答えてくれる者は誰もいない。

「・・・はぁ・・・同調・開始」
トレース・オン

外傷、特になし。

魔術回路正常。

魔力・・・・・・・・・・なんだ、これ！

士郎は驚いた。魔力の量が、世界と契約した時の何倍も増えているのだ。他にも、

「・・・身体能力がサーヴァントと同じぐらいにまで上がっている。それに体力まで。体もサーヴァント並みに頑丈になっている。いったいどうしたんだ、俺は・・・。」

他は・・・

「・・・投影の速度が飛躍的に上がっている?」

試しに愛剣《干将・莫耶》を投影してみる。

トレース・オン
「投影・開始」

そうすると、今までにないくらいに早く投影ができた。

「・・・スゴいな、これは・・・。しかし、ここは本当にどこなんだ?俺は固有結界を使った覚えはないし、第一、俺の魔力を消費していない。それに俺は死にかけていた。傷はなぜか完治してあるし・・・どういうことだ?」

士郎は一人で考え始めた。

《冬木王国城地下》ソラウミナside

「——我が名はソラウミナ・フローシア——」

英雄召喚の呪文を唱え始める。すると、地面の魔法陣が小さく輝きだした。

「——無限の剣の英雄よ。我が呼びかけに答えよ——」

《????》士郎side

あれやこれやと考えていると、突然、さっきの光の玉が目の前に現れた。すると……。

「——無剣英雄——呼——え——」

「……ん？なんだ？……声が聞こえた気がするけど……。」

その声は、とても小さく、しかし、しっかりと言葉を発していた。

「——無限の剣——英雄——我——呼び——答えよ——」

さっきよりも、少しだけハッキリと、声が聞こえる。

『——無限の剣の英雄よ。我が呼びかけに答えよ！！』

声がハッキリと全て聞こえた瞬間、士郎は光に包まれる。

「うお、なんだ！？またか！？それに、この声は・・・」

何なんだ、といい終わる前に、また光に包まれた。今度は士郎の意識はとばなかった。光の中で声がして、士郎に今起こっている事を伝えられる。士郎は世界を救う英雄として召喚されている途中ということ、世界が滅ぼされようとされていることを——。

「・・・色々あって正直混乱してるけど、やるべきことは見つかったな。世界を救うために与えられたこの命、世界を救うためだけに使おう・・・俺には、いや、私にはそれが出来るんだ。」

少し無理やり英雄にされそうな気がしたが、これも運命だ、と思うことにした——。

「——無限の剣の英雄よ。我が呼びかけに答えよ!!」

三回目の問いかけで、魔法陣は目くらむほどの光を発した。英雄を見つけたのだ。それをソラウミナは必死に耐える。

「——無限の剣の英雄、正義の英雄よ！我は望む！この国の民の平和、国の平和、そして世界の平和を！！故に欲しい！国を、民を、世界を守る力が！！守りきる力が！！正義の英雄よ！我が僕となり、共に戦いたまえ!!」

『——承知した。その願い、確かに受け取った。ここに契約を結ぶ。私の名を呼べ、マスター。』

「出でよ、無限の剣、正義の英雄、エミヤシロウ!!」

その名は、預言書に書かれていた英雄の名前。

【黒き闇が破壊をもたらす時、異世界の英雄により、黒き闇は滅ぼされん。】

魔法陣が光輝く。

そして、光の中から、1人の男が現れた。その者は赤い光に包まれていた……………。

STAGE 1：召喚（後書き）

感想、評価は筆者をとて元気づけてくれます。評価、感想お待ちしております。誤字、脱字などの指摘もお待ちしております。つぎの投稿はいつになるかわかりませんが、出来るだけ早く投稿できるようがんばります！

STAGE 2：出会い（前書き）

大変遅くなりました。待っていてくださった皆様、大変お待たせいたしました。

それではどうぞ

士郎の対魔が低すぎる、というご指摘をいただいたので、修正しました。

STAGE 2：出会い

——光が徐々に小さくなる。

閉じていた目を静かに開ける。足下には魔法陣。

（・・・この魔法陣は・・・）

そう、足元にある魔法陣はサーヴァントを召喚するためのものだった。

（オレはサーヴァントとして呼ばれたのか・・・）

士郎は顔を上げ、自分呼び出した者を見た。

目の前にはやや露出が多いドレスを着た女性・・・いや、少女がいた。綺麗な銀髪につい見入ってしまうほどに紅い深紅の瞳。

（イリヤみたいだな）

その髪と目は、士郎の姉でもあり妹でもあったイリヤを思い出させる。

その少女が口を開く。

「……あ、貴方は、その、ごによごによ……」

「??」

なぜか後の方が声が小さくて聞こえなかった。

「すまないが、もう一度言ってもらえないだろうか？声が小さくてよく聞こえなかったんだが……」

「ふえっ、わ、わかりました。」

……なんかビツクリされた。

それに、なんか話し方というか、言葉づかいがさっきと違うような……。

「えっと、あ、貴方はエミヤシロウ、ですよネ？」

「君が私を喚んだのであろう？ならばわかるはずだが？」

「え、じゃあ、貴方はエミヤシロウなんですね？」

「ああ、そうだが……」

なんでそんなに嬉しそうな顔をするんだ。

「すまないがマスター。ここはどこなんだ？そして貴女の名は？」

「ここはどこって……。確か召喚の時にあらかじめこの世界についてのことは大体情報として貴方に送ったのですが……？」

「世界が支配されそうになってあることぐらいしか私は知らされて

いないのだが？」

「……あら？」

「……ん？」

……なぜ意見が食い違う。もしかして、これは……。

「……もしかして、貴女は魔術の類を使うとうっかりミスをしてしまっタイプか？」

ビクッ！！

少女は端から見ても動揺していた。てか、ビクッてなった…。少女は小さな声で答える。

「……はい。」

ここにもうっかりさん。オレはつくづくうっかりする人によく出会った。

それも相当のレベルだ。

「「……………」。」

気味悪い沈黙。どうするかな……。取りあえず……

「マスター？質問に答えていただきたいのだが？」

「あ、はい。えっと、ここは冬木王国。私の名前は、ソラウミナ・フローシア。」

「……冬木王国？」

（何かの冗談か？冬木王国って……）

「ええ、そうですが？何か問題でも？」

「いや、何でもない。では、名乗っていたいたのだから、改めて私、いや俺も名乗らないとな。俺の名前は衛宮士郎。士郎って呼んでくれ、マスター」

「？話し方が変わりましたね。なぜですか？」

「……まあ、あまり意味はないんだが、親しい人にはこういう話し方だな。」

「そうなのですか……。ではシロウ？私のことはマスター、ではなく、ソラと呼んで下さい。」

「……ソラ？ソラウミナではなく？」

「ええ、ソラと呼んで下さい。親しい人は大抵私のことをそう呼びます。」

「しかし……」

「ソラと呼んでください。」

「……わかったよ、ソラ姫」

少し頬を赤らめて嬉しそうに微笑むソラ姫。
むう、なんか可愛い……

「そういえば、なんで今の話し方と召喚の時の話し方が違うんだ？
召喚の時はもっと、こう、力強かった気がするんだけど……」

「それは…召喚の時はああいう風にしないといけないらしいんです。
」

「いけないらしいって、よく知らないの？」

「はい。先祖から伝わる書物は、その、なんというか……」

「……要するに、先祖も、うっかり……」

「多分そうだと思います。」

姫のうっかりは血筋だったのか……。

「まあ、それはもういいや。それで？世界はどうなっているんだ？
ソラ姫。」

「……へ？」

なんて間の抜けた声を……。

「いや、だから世界の状況だよ。征服されそうだって聞いたんだけ
ど……。」

「あ、そこまで深刻ではないです。」

いきなりの変化球。正直意味が分からない。

「え？ちよつと待つてよ？この世界は征服されそうじゃなかったのか？」

「確かにそうなりそうですけど……世界は広いですから。」

誰もそんな事は聞いていない。

「えつと？姫？」

「はい？」

「……俺はなんで喚ばれたんだ？」

「世界を救うためです。」

いや、自慢げに言われても。

「で？その救うべき世界は？」

「広いです！」

……だめだ、会話にならない。言葉のキャッチボールが成立していない。すべて明後日の方向に飛んでいく。

それから7時間ぐらいかけて、姫に現在の状況について聞いた。なんでも、世界は危ないのは危ないが、そんなに焦ることもないらしい。《アンリ・マユ》はサーヴァントと、そのすべてのサーヴァントを使役するマスターが一人しかないらしい。だが、サーヴァントが現れた影響かわからんが、モンスターが凶暴化、いろいろな町を襲っているらしい。そのモンスター達を静めて（要するに退治）、世界を回り仲間を集め、最終的にサーヴァント全てを倒し、そのマスターを封印したら、役目は終わるらしい。

ここまで考えてふと気付いたが……

（RPG、みたいだな。）

姫はもう寝てしまった。一緒に寝ようといわれたが、いろいろマズいので丁重に断った。……涙目になれたときは正直困ったが、何とか引いてくれた。涙目でぐずっている姫は、どこことなくイリヤに似ていた。

次は一緒に寝てもらいます……と言っていたが気のせいだろう。

「？RPG？」

いやな予感がする。

「同調・開始」
トレス・オン

魔術回路

異常なし

外傷

特になし

魔力

.....

ふと、ある項目を見つけた。

「!?!?こ、これは!?!?」

名前：衛宮士郎

LEVEL：1

職業／クラス：アーチャー（弓兵）

HP：56

魔力（MP）：157386000

.....なんだこの魔力。

攻撃力：18

守備力：17

攻守は、まだ普通だな。

魔法防御：1

……

素早さ：61

幸運：-219

……正直涙が出るかと思った。でも、悲しいけどこれ、現実なのよね。対魔の低さと幸運Eは伊達じゃない。

「……………なんでさ……………」

姫に与えられた部屋で（姫の隣の部屋なんだが）、士郎は1人、頭を抱えていた。

STAGE 2：出会い（後書き）

書いているうちに内容がカオスになって、書き直して、またカオスになって……の繰り返しでした。次の更新もいつになるかわかりません……でも、なるべく早く更新出来るよう頑張ります。
ではまた次話で。

感想

や評価にいつも励まされています。ありがとうございます。

ですが、あまりきつい内容の感想は筆者のガラスのハートを粉々に砕いてしまうので、なるべく止めていただきたく思います。

STAGE 3：レベル（前書き）

大変遅くなりました（＜＞）

前回の更新から数えて5ヶ月弱・・・いい案が浮かばず、ずっと投稿できませんでした・・・しかも今回も短い・・・Σ（「□」）

待っていてくれたみなさま、大変お待たせいたしました（「――」）
<

それでは、どうぞ

STAGE 3：レベル

「……ひどい……ひどすぎる……。」

自分のステータスを見た士郎は例えようのないショックを受けていた。

「マイナスって……幸運マイナスって……。」

——士郎はソラ姫がくれた士郎用の部屋（何故か姫のすぐ隣の部屋）で1人うなだれていた。

初め見たときは見間違いかと思った。それから何回も見直した。しかし、数値は変わらない。

涙が出るかと思った。というかちょっと涙が……うう……。

——コンコン

部屋の扉がノックされる。

しかし、落ち込んでいる士郎は全く気がつかない。

『——シロウ?』

扉の向こうから声がするが、士郎は気付かない。

「——入りますよ？」

——ガチャ

ってシロウ！？どうしたのですか？お体の調子でも悪いんですか？
……えっと……聞いてますか？」

後半聞いてもらえていないと思ったのか、半分涙目になりながらシロウに尋ねる。

「……マイナス……マイナス……マイナス……マイナス……マイナス……」

今の士郎は端から見れば危ない人だ。

「えっと……どうしましょう……ぐすっ………そうだ！！」

ソラは昨晚の士郎の言葉を思い出した。

『所でソラ姫？俺を召還した時に体のどこかに刺青みたいなものが出来なかったか？』

『刺青、ですか？』

『いや、正確には刺青ではないんだが………』

『刺青……刺青……あ、もしかしてこれの事ですか？』

『ん？どれどれ………』

姫様は俺の前でドレスの胸元をはだけさせ、その白く柔らで丰满な乳房を………

『って、何をしてるんだ！？』

『何って、だからこれのことが確認してもらったために………』

『君には恥じらいつてもものはないのか……そんなに不思議そうな顔をするな！……いいか？目の前には男である俺。二人きり。そして、君の今の状況！』

『えっと……（士郎を見る）……（部屋を見渡す）……（そして、自分を見る）……キヤアアアアアアア！』

『気付くのが遅い！！いいから早く胸を隠せ！！』

『あ、あっち向いてて下さい！！』

ドゴッ！！

『ガハアッ！！』

姫の渾身のストレートが右頬に直撃！！
士郎に8のダメージ！！

理不尽極まりない。

『ふう、まったく油断も隙ありませんね。』

『お、俺はなにもしてない……………』

……………頬がまだ痛い。何故だろう？俺はこんな感じの理不尽な暴力を散々受けてきた気がする……………脳裏に赤い悪魔がギャアアア！！

『あ、危なかった……………』

『シロウ？』

『だ、大丈夫だ。それより話を戻そう。君の体にある刺青のようなそれ。それは「令呪」という』

『令呪、ですか？』

『そう。それはサーヴァントにどんなことでも命令できる物だ。サーヴァントの意志に関係なく、令呪に願ったことはサーヴァントが必ず行う。それだけでなく、どこにいても令呪に願えばどんなときにどんな場所においてもサーヴァントを呼び出すことができる。まあ、三回しか使えないから、よく考えて使わないとな』

『……………これにそんな効果が……………』

『令呪の力はマスターの魔術師としての強さ、魔力の高さで効果が薄くなったり、物凄くなったりする。ソラ姫はどうか？』

『……………わたしはこれでも歴代の王族の誰よりも魔力が高いんです。えっへん♪』

『そうか……………だったらここで一度使ってみるか？本当は無駄遣いはしないほうがいいんだけど……………まあ、今回は特別に。ではマスター。何でもいい。俺に願いを言ってくれ。』

『願い、ですか……………うゝん、願い……………今は……………ないですね』

『ない？随分欲がないマスターだな……………まあそれでもいい』あっ思いつきました！』……………どんな願いだ？』

『ずっと私と一緒にいてください！シロウ♪』

『なっ！！』

令呪が輝き出す。

『すごい令呪の力だな……確かに君の魔力はスゴいらしいな。……しかし、こんなにそんなこと、令呪に願わなくても……言われなくても、ソラ姫はオレのマスターなんだ。ずっと姫のそばにいるさ。』

『し、シロウ……そんなに近くで言われると、その、照れます……』

『あ、ああ！悪い悪い。……えっと、そろそろ休んだ方がいい。俺を召還してかなり疲れているはずだ。ゆっくり休むといいよ。』

あの時のことを思い出して少し恥ずかしくなる。私、どうしてあんな事しちゃったんだろう……でも、今思い出すべき記憶ではなか

「たかな……」

「それは置いておいて」

士郎に近づき、耳元で呟く。

「士郎、令呪使いますよ?」

ビクッ

士郎の反応にこちらもビクリしました……

「えっと、おはようございます、シロウ」

「あ、ああ……ソラ姫か……おはよう」

「……それで何があったんですか?思わず引いちゃつくらしいの負のオーラが出てましたけど……」

「・・・ああ、その事が・・・いや、何でもない」

「何でもない訳ないじゃないですか。スゴかったですよ？落ち込み方が」

「・・・わかった、話すよ・・・その前に一ついいか？」

「ええ、いいですよ？」

「姫にもレベルはあるのか？」

「えっと・・・レベルですか？」

「ああ」

「はい、ありますよ？」

「そうか・・・」

「えっと・・・それとさっきのはどういう関係が？」

「昨日の夜に自分のステータスを初めて見たんだ・・・」

「？」

士郎は自分のステータスについて話した

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

——しばらく沈黙——

「・・・あの、その・・・なんていつていいのか・・・」

「いや、気にしないでくれ・・・ここにくる前の世界でもこんなだった・・・もう慣れたよ・・・ところで、ソラ姫はレベルはいくつだ？」

「私はですね・・・えっと確かあ・・・34だったかな？うん、34です。」

オレは自分が情けない

「・・・スゴいとかいいようがないな。」

「少し頑張ればこれくらい楽勝ですよ？」

「・・・それで、レベルはどうすれば上がるんだ？モンスターを倒せばいいのか？」

「基本はそうですけど・・・困っている人を助けたり、依頼をクリアしたりすると、経験値がたまってレベルが上がります。」

「なる程・・・」

要するに人の役に立て、ということか。

「では早速行くとするか。」

「行くってどこにですか？」

「決まってるじゃないか、レベルを上げにいくんだよ。少し体を動かして不調がないかも確かめたいしな。試しにモンスターでも倒してくるよ。」

「では、私もお供します。」

「それは助かる。じゃあいこうか！」

「はい、シロウ。」

STAGE3：レベル（後書き）

如何だったでしょうか

自分で読み返したんですが、全体的に荒いですね・・・

もっと精進します

（・・・）

次投稿もまたいつになるかわかりませぬ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5192h/>

ふえいと/くえすと

2010年10月10日05時49分発行